家族を想う

三岸節子には、1934（昭和9）年31歳で逝去した三岸好太郎との間に三人の子どもがありました。29歳からこの子達を一人で育てていくことになった節子の苦労はどれほどのものであったでしょう。制作に専念し、しかし、常に子ども達のことを心配し続けた節子の想いに触れながら作品をみていきます。

節子の子どもへの想い

「広い世間にたつた三つのこれはいとしい私のもの。雨や嵐にもあてないやう、不自由させないやう、どれほど粉骨したかしれません。まかり間違へば芸術さへも犠牲にして悔いることのない献身愛ですけれど。さすがの私も子供のことだけは盲目になるのです。」(注1)

「あなたに説いてもわからない神秘なもので、私の仕事の活力素みたいなもの、子供は私の生活の原動力です。いい仕事をすれば生きてゆかれる、まる六年余り私の頭から瞬時も去らないたつた一つの言葉です。」(注1)

節子にとって、子どもは何ものにも代えがたい存在でした。初期作品をみると室内の静物を描いて、その中に子どもを配しています。幸せに思う時、不幸に思う時でもつねに身近な存在であり、節子が寄り添っていたことがわかります。

《室内》1942　©MIGISHI

好太郎の子どもへの想い

夫の好太郎にとっても子どもたちは大切なものでした。こんなエピソードが書かれています。

「好太郎はもともとかなり芝居っけたっぷりの父親だった。クリスマスイブを間近に控えたある夜、深々と雪が降り積もった。珍しく家にいる父親の側に陽子と杏子はへばりついていた。とやにわに好太郎が電話をかけるジェスチャーをし、『いま、サンタクロースに電話をかけている。陽子も杏子もサンタさんのプレゼントなにがいいか言ってごらん』と一人一人に欲しいものを言わせ、それをサンタクロースに面白おかしく伝えてみせた。クリスマスの朝、目を覚ますと子どもたちの枕許に、好太郎がサンタクロースに電話で頼んでくれたプレゼントが置かれていた。」(注2:P83)

また、この後生まれた男の子に、好太郎は巴里（ぱり）と名づけ、「パコ」という愛称で呼んでいます。

オトウサンハ　ナキタクナリマシタヨ　ヨウコチャンハ　ニコニコ　シテイルコトデショウネ。
キョウコチャンハ　オオキナ　メヲ　クリクリ　サセテイルデショウ。
パコハ　オイタガスキニナッタトイウカラ　ツヨイ　オトコノコ　ニ　ナッタニチガイアリマセン。 オトウサンハ　ミンナノ　コトヲ　カンガエルト　ハヤク　一日　モ　ハヤク　サギノミヤノ　ウチニ　カエッテ　アカシアノ　キノ　シタデ　コウチャヲ　ノンダリ　ゴハンヲ　タベタリ　シタクナリマシタ。(注2:P93)

三岸好太郎・節子と子どもたち
1932年　©MIGISHI

好太郎が自宅にいるときの子煩悩さが伝わってきます。しかし、息子に巴里と名付けずにおられなかった渡欧への夢もひしひしと感じられます。

黄太郎の母への想い

「黄太郎は空気のような人間です。全然邪魔にもならず、気を遣ってくれますし、一番私にとっては理想的な男ですね。父親に似て優しい男で、私と気が合うんです。」(注3:P19)と節子は言います。

1954（昭和29）年の節子初渡欧をフランスで待ち構えていたのは黄太郎でした。彼の運転でフランスはもとより、イタリア、スペインまで美を求める旅に出かけます。どんなに素晴らしい風景に出会っても、黄太郎は節子と一緒にスケッチをすることはありませんでした。節子の世話を優先させてきたからです。節子の絵に対する貪欲さ、執拗さに、まるで夫のように、恋人のように、嫌な顔一つみせずつき合い続けていたのです。彼自身、日本を離れる直前に「これで母の面倒を一生見ることになるのだろうな。」(注2:P270)という思いを抱いていたのでした。この後、1968（昭和43）年からの黄太郎一家とともに過ごした20年余に及ぶフランスでの生活でも、この姿勢は変わることなく母親と息子の濃密な関係は続きました。節子も売ろうという媚のない、好きなものだけを描くという黄太郎の制作への姿勢と、父好太郎に似た寒色の色使いが作り出すポエムをこよなく愛していたのでした。

《細い運河》1974　©MIGISHI

友人の見た節子と家族

「ひな鳥を抱え込んだ母鳥みたいなところがあったわね。だけど嘴にはしっかりと絵筆くわえていた。」(注2:P161)と、作家の佐多稲子は節子について語っています。家族が増えるにつれて、節子の家族への想い（気病み）は三人の子どもとその伴侶だけではなく、五人の孫たちにまでその範囲は広がっていたのです。フランスから日本の娘たちへ、幾度も幾度も手紙が往来しています。しかし、この家族に対する節子の深い想いが、節子をカンバスと対話させ、節子の絵を描く活力となって我の世界へとのめり込んでいき昇華され、作品となって表出してきたのでした。

（注1）三岸節子「未踏の茨の道を」『黄色い手帖』求龍堂、1983年　（注2）吉武輝子『炎の画家 三岸節子』文芸春秋、1999年　（注3）林寛子『修羅の花』講談社、1989年

ICHINOMIYA CITY MEMORIAL ART MUSEUM OF SETSUKO MIGISHI